

## 身体と意識の彼岸から

Beyond the Body and Consciousness

### 渡邊淳司

Junji Watanabe

私たちの心が感じるものには二重のイメージが内包されている。環境に関する知覚イメージと、自身の身体に関する情動イメージ。言葉を換えれば、環境を脳内でモデル化した表象と、環境に対する身体反応の表象。そして、これらイメージが、自分の生に根本的な、自身の外部(環境)と内部(身体)に対する存在感覚を支えている。本論では、この2つのイメージについて、それらの生じる過程と、その感覚の情報技術による変容について考えてみたい。

#### 知覚過程と情動過程

はじめに、心が感じる2つのイメージ、知覚イメージと情動イメージについて、本論における定義づけを行なう。

知覚過程は、身体の五感センサを通じて、環境からの情報を取得することから始まる。その信号は神経システムによって脳の初期感覚野へ送られ、さまざまな情報処理を経て、知覚イメージを作り出す。例えば、視覚では、網膜の光受容器からの情報が脳の初期視覚野へ送られ、さらに形や色、運動などの情報に分けて処理され、心が視覚イメージとして認識するような神経発火パターンが脳全体に生み出される。

そして、生じた知覚イメージは、外部環境に帰属させられた状態で、心に認識される。色や音等の知覚イメージは、環境からの物理刺激を引き金とするが、人間の感覚センサ、脳内の情報処理によって生み出された純粹な内部情報である。にもかかわらず、私たちの心には、外部の環境がその知覚イメージを持った実体として感じられるのである。このことは、

知覚過程に「知覚イメージを生成する過程」だけではなく、「知覚イメージを環境に帰属させる過程」が存在していることを意味する。知覚過程において、生成された知覚イメージそのものはその人固有のものであるが、それが志向するものは非個人的な外部環境であり、その志向作用によって、心に、環境が確かに存在し、自己と結びついているという実感を生み出している。

感情は実体のないものでもなければ、捉えがたいものでもない。伝統的な科学的見解に反し、感情は他の知覚結果と同じぐらい認知的である。

Antonio R. Damasio, *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*

普段、私たちは、喜怒哀楽という感情(情動イメージ)が心に生じる過程を茫漠としたもののように考えがちであるが、ダマシオの言うように、そのような情動過程を知覚過程と比較しながら見ることで、より認知的な過程として分析することはできないだろうか<sup>[1]</sup>。

情動過程も知覚過程と同じく、環境情報を取得することから始まっている。その信号は身体の調節システムの活動を変化させ(興味あるものには瞳孔を開き、緊張すれば手に汗を握り、恐怖するものには冷や汗が出る)、その状態をモニタしている部位を含む脳全体があるパターンで神経発火を起こし、心に情動イメージ(うれしい、悲しい、怖いという実感)を生み出す。そして、情動イメージを認識することは、自身の身体反応、ひいては自身の身体存在を認識させる作用がある。単純化すると、情動過程とは、環境に対する身体の反応とそれに基づく「情動イメージを生成する過程」、およびそれらを通じて、「自身の身体を志向する過程」によって構成されている。このように、情動過程は捉えがたい心の状態変化というよりむしろ、調節系の身体反応と結びついた、身体全体を使った環境認知の過程と考えることができる。